

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 19 日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520580

研究課題名(和文)ルーン碑文を利用した、中世ノルウェー語の英語への影響研究

研究課題名(英文)A Study on the Influence from Medieval Norwegian on English in Reference to the Runic Inscriptions

研究代表者

伊藤 盡 (ITO, Tsukusu)

信州大学・人文学部・准教授

研究者番号：80338011

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円、(間接経費) 1,020,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果は次の4点に集約できる。一、北欧語語彙の借入の「揺れ」の状態を、カンブリア地方の地名に明確に確認できたこと。二、カンブリアのブライドカーク教区教会に現存する洗礼槽に刻まれたルーン碑文の未読二文字に新たな解釈を行えたこと。三、12～14世紀にかけてノルウェー語が屈折語尾を保持する一方で、母音や子音に音変化が見られるが、その中世ノルウェー語と比較することで、カンブリア方言の北欧語からの借入語の語幹母音の変化の過程をより明確に確認できたこと。四、日本人英語教育者のために、北欧語話者と中世英語話者の言語接触の歴史的過程について新たな記述と理解の必要性を説いたことである。

研究成果の概要(英文)：Our project has reached the following four stages of suggestive conclusion: 1. The indecisive states in the borrowing process of Old Norse in certain place-names in Cumbria indicates that the process was not straightforward, but a result of series of trial-and-error made by the speakers of both languages. 2. The two of the hitherto enigmatic and debatable runic inscriptions carved on the 12th century font preserved in Bridekirk parish church, Cumberland, are 'y' and 'thorn', forming the preterite participle suffix of an ON derived verb 'gere'. 3. The comparison with the 12th-14th century Norwegian runic inscriptions acknowledges the phonological changes in the Cumbrian dialect in the later Middle Ages more distinct. 4. The recognition of the process of amalgamation of medieval Scandinavian with English will provide the teachers of the English language in Japan with more profound understandings of the nature of English; English as a part of the Northern European culture.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：英語史 古北欧語(古ノルド語) 古英語 言語接触 ヴァイキング 借入語 ルーン碑文 カンブリア

## 1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、研究開始の時点までに、カンブリア地方の北欧語話者から継承し、アングロ・スカンディナヴィア文化と呼ばれる独自の文化を発展させた考古学的史料を取材していたが、さらに古英語時代の北欧語話者のイングランド移住の際における二言語話者間の口語による意思疎通に関する先行研究を渉猟しており、二つの極論について考察を行うことで、古英語・古北欧語の言語接触に関する以下の課題を主張するようになっていた。

古英語・古北欧語話者間の意思疎通に関しては、一方に、二言語話者間の意思疎通を可能だとする Townend の論 (M. Townend, *Language and History in Viking Age England: Linguistic Relations between Speakers of Old Norse and Old English* (Turnhout: Brepols, 2002) があり、もう一方に、両者間の意思疎通が困難であったと主張する Fjalldal の論 (M. Fjalldal, *Anglo-Saxon England in Icelandic Medieval Texts*. Toronto: U of Toronto P, 2005) がある。しかし、どちらも概論としての性格の強さから、以下のような論点の不足を生じていた。

すなわち、英語については、イングランドの各地方における意思疎通の程度の差違や、地方毎に語彙借入の影響の大きさや浸透の差違について、具体例に基づく考察がなされることはほとんどなく、特にイングランド各地の方言に現在も残された独自の発音や語彙については考察の対象とされず、中世以後の文献に現れる語彙の地域間の異綴りについて注意も払われることがなかった。古北欧語についても、デンマークやノルウェーなどの方言間の差違も基本的考察対象から外されている。

したがって、二言語間の意思疎通が可能で、その結果として多くの古北欧語語彙が古英語に借入されたという、英語史における従来の考え方を踏襲するにしても、Fjalldal のように反駁するにしても、その証明となるイングランド各地の言語資料と、デンマークとノルウェー語のように方言的差違を含んだ古北欧語との精緻な照応関係に関する研究が、概論の隙間を埋める研究として、今後必要とされるわけである。

## 2. 研究の目的

古英語・古北欧語の二言語間の意思疎通が、具体的に如何に行われ得たか、或いは行われ得なかったかの検証の一環として、今日残存する言語資料から中世初期の英語および中世北欧語の言語的特徴を比較し、イングランドと北欧の地方に現在も残る言語文化の継承を跡づけるため、その実例の一つである、カンブリア方言 (地名・語彙) の音韻論的特徴と、ノルウェーのルーン碑文から確認され

る音韻論的特徴を比較し、両者の対応関係を理論化することが、本研究の目的である。

## 3. 研究の方法

本研究は四つの方向から研究を進め、最後にそれらを統合することで、研究目標の達成に努めた。第一にはカンブリア地方の言語資料の収集、第二にノルウェーのルーン碑文の資料収集、第三にデンマークからの移住者の言語環境理解、第四に言語接触の理論的解釈である。これらをまとめた上で、言語資料の比較を行うことで得られる知見を記述した。

第一のカンブリア地方 (旧 Cumberland, Westmorland 地方) の地名資料の収集として、まず本研究開始以前に取材していたカンブリア地方に残されたルーン碑文資料、本研究開始後に収集し始めた、*Language Atlas of Late Middle English* (<http://www.lel.ed.ac.uk/ihd/elalme/elalme.html>) のデータを含めたカンブリア方言の言語資料 (方言辞典、書籍)、地名辞典の入手、検証を行った。

第二のノルウェーのルーン碑文の資料収集は困難を極めた。まずブリュッゲン博物館、オスロの国立民俗史博物館に赴き、ルーン碑文のデータベースだけでは確認できない碑文の写真データの収集に努めた。一週間の短い滞在期間内で、ブリュッゲンの全 670 サンプルの碑文のなかで、特に写真撮影を希望した 81 例中、写真に収めることができたのは 40 サンプルだけであった。一方、オスロ民俗史博物館での碑文の撮影は高品質の写真は撮影できず、参考画像としてのみ利用することとした。しかし、その 40 サンプルに基づき、先行研究の一つである T. Spurkland の博士学位論文 (1991) および中世ノルウェー語の言語的特徴を残したブリュッゲンから発掘されたルーン碑文のデータベースを利用して、ブリュッゲンで取材したルーン碑文 100 例の言語資料を検証した。

第三の、ノルウェー系の移民との差違を明確に認識する目的で、デンマークのヴァイキング基地の遺跡を訪ね、デンマーク語系の北欧語話者がイングランドに移住する過程および背景を取材し、ノルウェーとの言語環境の差違を確認した。イングランド遠征を行ったデンマーク王国の国力と民族性に関する現地取材は、今回の研究に必要な部分は入手でき、デンマークのフィヨルド地形とヴァイキング基地の規模の大きさが、ノルウェーのブリュッゲンのような商業都市と異なり、大規模な船団と兵士の確保に役立つさまを確認できた。もっとも、歴史学的文献資料の入手は予定していたよりも希薄であった。

第四の言語接触の理論的解釈だが、本研究の範囲は言語接触により導かれる中世英語の音韻論的变化と形態変化に焦点を当てた。言語接触による文法化理論や意味論的变化は敢えて除外した。しかしながら、当初の研

究範囲に設定していた、中世ノルウェー語における古英語との言語接触による音韻論的变化については、研究範囲に含めることができなかった。その理由として、ノルウェーのルーン碑文の直接的資料が計画通りには集まらなかったことが挙げられる。後述のように今後の課題となる。

以上第一～第四の方向から研究を進め、それらを統合する形で、(i) カンプリアのルーン碑文の解読、(ii) カンプリア地方の地名における語彙変換過程の分析、(iii) ノルウェーのルーン碑文における文字素と音素の対応関係の分析を行った。

#### 4. 研究成果

本研究の成果として、(1) 北欧語借入過程における「揺れ」の存在の確認。(2) カンプリア方言のルーン碑文の新たな解読の成功。(3) 12世紀から14世紀のノルウェー語形態の保守性と音声変化の兆候の確認、(4) 北欧語話者と中世英語話者との言語接触の歴史的過程の記述、そして(5) 今後の課題について述べる。

##### (1) 北欧語借入過程における「揺れ」の存在の確認

英語史において、北欧語の英語への借入は一樣に説明される結果論である。例えば Townend は古英語 *sc(e)aga* 「森」が、Brisco などの現在の地名として残るためには、北欧語 *skóg* を借入したと説明する(58-59)。しかしながら、Allerdale の村 Brisco は、1203年の段階で既に *-sco* という綴りを獲得しているのに対し、St Cuthbert Without の村 Brisco は、1285年まで古英語起源の *-schawe*, *-saw* という綴りが用いられ、しかも1321年には、再び *-schawe* という綴り字が記録されている。すなわち、地域、特に北西部方言における北欧語借入は、各村落単位に見れば決して一樣に行われたわけではなく、かつ北欧語借入も進行と逆行を併い、いわば「揺れ」ながら語彙借入が行われていったことが判明した。ある意味で、北欧語借入は「結果論」とも言える。

##### (2) カンプリア方言のルーン碑文の新たな解読の成功

カンプリア地方の12世紀に作られた考古学上の遺物に Bridekirk 教区教会に現存する洗礼槽がある。そこにはカンプリア地方には散見されるものの、イングランドの他の地域では用いられなかった北欧系ルーン文字とアルファベットの混在する碑文が刻まれている。ブリテン島のルーン碑文研究をまとめた Holman によれば、この Bridekirk, Cumbria 碑文 29, 30 番の文字は解読が不明であるとす。しかし、LALME の GAR, および過去分詞語尾 *-yð* の分布を参照するとき、26-30 は

*ger*yþ と読むことが可能となる。恐らく 27, 28 番の exemplar と見誤ったルーン彫師が誤って *e*, *r* を刻み、その後 *y*, *þ* を刻み直したものである。19世紀のカンプリア方言では 'make, do' の意味で *gar* という北欧語 *gora* からの借入語が用いられていた。母音は LALME に依れば Westmorland に *a*, *e*, *ey* が確認できるが、本研究が明らかにしたことが正しければ、Cumberland である Bridekirk に *ger* という語形が early Middle English の時代に存在した文献的証拠としての価値を有す。

##### (3) 12世紀から14世紀のノルウェー語形態の保守性と音声変化の兆候の確認

わずか40例ではあったが、ノルウェーのルーン碑文の中に、12世紀から14世紀にかけて、ノルウェー語の母音と子音の発音に変化の証拠が見られている。11世紀までの二重母音 *ei* は、12世紀末から14世紀まで、主に *æi* とルーン碑文で一貫して刻まれている(1198年頃 B303, 1248年頃 B149, B215)。これは、12世紀の Bridekirk のルーン碑文の *ger-*と著しい差違を示す。LALME によれば、古北欧語 *gora* は *gar*, *ger*, *geyr* の綴り字の異体が認められるが、12世紀 Cumberland では、古北欧語の発音をまだ保持していた可能性を示唆する。それに対し、ノルウェー語は、名詞の格変化語尾、動詞の人称変化(B149)は保持しつつ、それ以外の発音は変化の兆しを示す。典型的な例は女性名 *Guðrún* のルーン綴りである。1198年頃の B303 では *gubrun* であるが、1332年頃では *gubnrun* となっている。書き間違いという考え方もあるが、鼻音が追加されるようになったと考えることもでき、固有名詞でさえも発音が変わっていると解釈することもできる。このことをオスロ大学 T. Spurkland 教授に問い合わせ、鼻音の可能性は捨てきれないとのコメントを受け取った (Personal Correspondence)。

##### (4) 北欧語話者と中世英語話者との言語接触の歴史的過程

北欧語話者とイングランド人との接触は、789(787)年のヴァイキング襲撃事件に始まったわけではない。しかも、デンマーク人、ノルウェー人、スウェーデン人と、現在の国名だけでは収まらない、北欧の各地からヴァイキング船に乗って北海を渡ってきて、イングランドに定住し、最終的に言語接触の影響を英語に残した。日本の多くの現代英語教育者は、英語を英語そのものとして教えるが、北欧語との接触を通じて英語が現在の形の素地を形成したこと、またその過程を記述し、啓蒙的な書物を出版する必要がある。本研究では、『英語教育』誌上に記事として掲載し、第29回日本中世英語英文学会全国大会において、「善きヴァイキングとの出逢い」と題

するシンポジウムを開催し、松瀬憲司准教授（熊本大学）、小澤実准教授（立教大学）と本研究代表者をパネリストとし、横田由美准教授（東京家政大学）をディスカッサントとして参加させ、北欧語とその背景を、英語という言語の理解のためにもさらに研究し、その研究成果を世に発表することをうたった。また、現在、このシンポジウムの内容を出版する準備を進めており、出版予定の出版社に梗概を提出した。

#### (5) 今後の課題

本研究は、ノルウェーのルーン碑文の資料収集と、カンブリア地方の言語資料の収集において、当初の研究計画が目指した範囲の収集を行うことができなかった。そのため、まだ研究は中間発表的な成果のみ発表することとなった。今後は、中世ノルウェーのルーン碑文の網羅的な精査を行うことが課題であり、同時に、カンブリア地方の言語資料の網羅的な収集とそれらのノルウェー語との対応関係のより詳細に比較考察が求められる。カンブリアには、デンマーク人も少数ながら入植したことも地名から分かっているが、カンブリアという地方自体も小さな教区が数々存在するため、その地域ごとの地名の継承の過程をさらに詳しく検証することで、北欧語の借入過程がより明確に跡づけられる可能性がある。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計7件)

伊藤 盡「イングランドから北海沿岸文化を訪ねよう:ヴァイキングの歩みとともに」(第6回)「デンマーク。イングランドに最も近い北欧」『英語教育』(2013年3月号) pp.1-4, 査読有

伊藤 盡「イングランドから北海沿岸文化を訪ねよう:ヴァイキングの歩みとともに」(第5回)「スウェーデンとイングランド:冒険・伝説・神話の舞台へ」『英語教育』(2013年2月号) pp.1-4, 査読有

伊藤 盡「イングランドから北海沿岸文化を訪ねよう:ヴァイキングの歩みとともに」(第4回)「伝説と神話の生きるノルウェー:スノッリの『ノルウェー王のサガ』の伝承と受容」『英語教育』(2013年1月号) pp.1-4, 査読有

伊藤 盡「イングランドから北海沿岸文化を訪ねよう:ヴァイキングの歩みとともに」(第3回)「コリングウッドのアイスランド訪問」『英語教育』(2012年12月号) pp.1-4, 査読有

伊藤 盡「イングランドから北海沿岸文化を訪ねよう:ヴァイキングの歩みとともに」(第2回)「アングロ・スカンディナヴィ

ア文化の痕跡:カンブリアの教区教会(2)」『英語教育』(2012年11月号) pp.1-4, 査読有

伊藤 盡「イングランドから北海沿岸文化を訪ねよう:ヴァイキングの歩みとともに」(第1回)「アングロ・スカンディナヴィア文化の痕跡:カンブリアの教区教会(1)」『英語教育』(2012年10月号) pp.1-4, 査読有

伊藤 盡「北欧語から英語への借入語としての Troll」『信州大学人文学部 人文科学論集. 文化コミュニケーション学科編』46(2012), pp. 69-83, 査読有

[学会発表](計7件)

伊藤 盡, 「中世ノルウェー語と中世英語の言語接触:ブリテン島北西部におけるノルウェー人から見た言語変化」, シンポジウム「善きヴァイキングとの出逢い:英語史・中世イングランド史における北欧人の役割」2013年11月30日, 第29回日本中世英語英文学会全国大会(愛知学院大学日進キャンパス)

伊藤 盡, 「総論」, シンポジウム「善きヴァイキングとの出逢い:英語史・中世イングランド史における北欧人の役割」2013年11月30日, 第29回日本中世英語英文学会全国大会(愛知学院大学日進キャンパス)

Tsukusu ITO, *Búri as deus terra editus and Þórr as Iarðar burr: The Earth-born Gods in the Scandinavian Mythology Revisited*, 2013年11月25日, International Workshop: Old Icelandic Texts in Medieval Europe (立教大学池袋キャンパス)

Tsukusu ITO, 'Historicity of the Cumbrian Dialect of English: Dialectizing Process through Language Contact,' 2013年8月8日, The 21st International Conference on Historical Linguistics (IFIKK, Universitetet i Oslo, Norway)

Tsukusu ITO, '*Búri as deus terra editus and Þórr as Iarðar burr: The Earth-born Gods in the Scandinavian Mythology*' 2012年8月10日, The 15th International Saga Conference 5-11 August 2012 (Aarhus University, Denmark)

Tsukusu ITO, 'Old Norse Idiomatic Phrases Incorporated into the English Language,' 2011年7月29日, 20th International Conference on Historical Linguistics, July 25-30. (国立民族学博物館)

Tsukusu ITO, 'The Origins of the Name "Thrihyrne" in *The Lord of the Rings* in Relation to the Icelandic Sagas.' 2011年5月11日, 46th International Congress on Medieval Studies May 12-15, 2011. (Kalamazoo, Western Michigan University, US)

〔図書〕(計1件)

清水誠編, 伊藤盡他共著『アイスランドの言語、神話、歴史: 日本アイスランド学会30周年記念論文集』麻生出版, 2011年4月, 300頁(「『風呂に入る』の英語表現 To Take a Bathは古北欧語からの借入か?」, pp.133-39を担当)

〔その他〕

ホームページ等

[http://www.shinshu-u.ac.jp/faculty/arts/prof/itou\\_2/](http://www.shinshu-u.ac.jp/faculty/arts/prof/itou_2/)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊藤 盡 (ITO, Tsukusu)

信州大学・人文学部・准教授

研究者番号: 80338011

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし